三　東京外国語学校の拡充・発展

1　日露戦争と東京外国語学校

日露戦争の勃発

二十世紀を迎えて、朝鮮半島の支配権をめぐる日本とロシアの角逐は、いっそう激しさを増していた。特に、ロシアが清国と一九〇二（明治三十五）年四月に結んだ協定では、翌〇三年十月までに「満洲」（中国東北地方）の全域から撤兵すると約束しておきながら、それを守らなかったことから、日本の国内では、対外強硬を唱える声が急速に高まった。政府は、一方で日露協商交渉を続けながらも、戦争への準備を進めていたが、一九〇四年二月四日交渉を打ち切り、同月八日、旅順港に停泊中のロシア軍艦に奇襲をかけて戦端を開いた。かくして、以後一年余にわたる戦争が繰り広げられることになった。

この戦争は、世界史的に見ても、旧来の戦争とは性格が異なるものであった。十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて世界の各地で展開された戦争の多くは、強大にして最新の軍事力をもつ欧米列強諸国が、いまだ近代的統一国家をも形成していないアジア・アフリカの諸国・諸民族を力ずくで圧降させて、自らの支配下に組み入れていった植民地獲得のための戦争であり、多くの場合、彼我の軍事的力量の差異ははじめから歴然としており、決着は極めて一方的についた。しかし、日露戦争は、大国同士が総力を挙げてぶつかり合い雌雄を決する長期の戦争であり、二十世紀に入ってから最初のものである。というより、そのような戦いをそれ以前の世界史に求めるならば、三〇年以上も前

の普仏戦争（一九七〇―七一年）にまでさかのぼらなければならない。しかし、その間に軍事力の進歩はすさまじく、かつ戦略・軍略にも格段の進歩があった。例えば、日本軍がその攻略に半年近くもかかった旅順のロシア軍要塞は、コンクリートで固めた堡塁に機関銃や速射砲を装備し、当時の先進技術を動員した近代的な大要塞であった。また、奉天会戦（両軍兵力約六七万、二四日間）・遼陽会戦（同約三六万、一一日間）・沙河会戦（同約四三万、七日間）などは、両軍の動員規模において前例にないものであったが、それでも直ちには終戦に結びつかなかった。さらに日本海海戦は、巨砲を搭載した大戦艦隊同士が、数十隻で海上決戦を展開した史上空前の大海戦であった。

日露戦争が、こうした大規模な戦争となった理由としては、当時の世界情勢、特に欧米の大国間の思惑を抜きにしては論じられない。すなわち、イギリスは単に日本の同盟国であったということだけではなく、ロシアの強大化が極東の軍事バランスを崩すことを危惧していたので積極的に日本を支援したし、アメリカもほぼ同じ立場にあった。いっぽうロシアの背後には、友好国であったフランスの存在があったし、さらにはドイツも英・仏への対抗上、ロシアを支援した。このようなことから、今日の歴史学界では、この戦争が第一次世界大戦に先立つ欧米帝国主義の代理戦争であるという評価が通説となっている。

しかし、いかに英・米の支援があったとはいえ、これだけ大規模な戦争を遂行するのは、容易なことではなかった。当時の国家の年間予算はおよそ二億円ほどであったが、この戦争の戦費総額は一九億八千余円にも達し、例年の国家歳出の一〇倍近くにものぼった。また、動員兵力は陸軍だけでも一〇八万人になり、戦死・戦傷者は合わせて四〇万人を超えた。日露戦争は、まさに当時の日本にとっては、将来への命運をかけた大戦争であったのである。

日露戦争と東京外国語学校

東京外国語学校は、この戦争に際して、どのような対応を迫られたのであろうか。『東京外国語学校校友会雑誌』一九〇六年五月の「明治三十七八年戦役中に於ける本校の状況」に拠りながら、その間の事情を見ておくことにしよう。

まず、日露関係が風雲急を告げてきた一九〇四（明治三十七）年一月はじめ、早くも陸・海軍より、韓語に熟達した者五、六名を派遣してほしいとの求めがあった。それを皮切りに、個別の師団からも、露・清・韓語学科に対して同様の依頼が来るようになった。学校側では、個別の要請には応じ切れないと断ったが、通訳の需要が多いために、卒業生だけでは必要な人数が間に合わないことから、結局、文部省の許可を得て、右の三語科の卒業試験を三月二十三日に繰り上げて実施し、軍事通訳となる者に特別の措置を講じた。

しかし、それでも間に合わず、さらなる対処を迫られた。そこで、本科の露・清語学科の生徒に対して、六月十五日から八月三十日まで特別に講習会を実施し、夏期休暇を廃止して特訓した。受講者は、露語学科二九名、清語学科一八名である。清語学科では、三年生だけでは足りずに二年生でも優秀な者は、通訳に仕立てたという。また露語学科では、十一月二日に第二回目の繰り上げ卒業試験を実施した。しかし、翌〇五年一月の旅順攻略の後は、ロシア人俘虜が急増したことから、ロシア語通訳がさらに必要となり、二年生をも通訳にしたのみならず、一年生をも実習生という名目で、各地の俘虜収容所に配属したり、校内に設けた特別室で俘虜の書面数千通の翻訳の仕事に従事させたりした。また、韓語学科でも、二月九日、第二回目の繰り上げ卒業試験を実施して、急場に対応した。このように繰り上げ卒業を実施したことから、露・清・韓学語の三学科では生徒が少なくなったので、入学試験を例年より三か月早めて、四月に実施した。

戦争によって語学に通じた者の需要が増加したのは、右の三語学科には限らなかった。欧米各国の新聞からの情報を集める必要が生じたし、さらに現場での外国武官との応接や外交官との接触が多くなり、平時に比べて通訳が多く必要になったからである。このようなこともあって、英・仏・独・伊・西語学科といえども、外国語の堪能な外国語学校の卒業生には、声がかかった。例えば、英語科第五回卒業の荘直一は、それまで翻訳・著述に従事していたが、陸軍通訳官に取り立てられて、旅順口要塞司令部付を命じられた。

結局、この戦争の間に、陸・海軍通訳として勤務した者は、卒業生のみならず、一部在校生も含めると二〇〇名以上に達した。

また、この戦争は、卒業生や在校生のみならず、教師たちにも大きな影響を及ぼした。例えば、ロシアが敵国となったことから、露語学科の外国人教師ヨゼフォヴィッチは契約中にもかかわらず帰国を希望した。彼は、元陸軍大佐であった。いっぽう、同学科講師の小島泰次郎は、本務が陸軍の教授であったことから出征の命を受けて外国語学校を辞めることになった。そこで露語学科では、ロシア留学中の八杉貞利教授を召喚することにするとともに、帝国大学の外人教師ケーベルに講師を委嘱することにした。八杉貞利（一八七六―一九六六）は、日本におけるロシア語研究の先覚者であり、その功績として日本で最初の露和辞典を編んだことで知られている。ケーベル（一八四八―一九二三）はロシアのノヴゴロドで生まれ、モスクワ音楽院卒業後、父親がドイツ人であったことから、イエナ、ハイデルベルク両大学で哲学・文学を学んだが、一八九三年に東京帝国大学教授として招かれて、西洋哲学史を講じていた。ケーベルに関しては、夏目漱石に「ケーベル先生」という小品がある。

このほか、学校当局には、陸軍省より韓語通訳の試験委員を委嘱してほしいという依頼があり、金沢庄三郎教授が務めることになった。さらに捕虜情報局からもロシア語通訳の依頼があり、五十嵐清助教授と藤堂紫朗講師が嘱託と

して務めることになった。

以上のように、東京外国語学校では、通訳という特別な才能を通じてこの戦争にかかわったが、日本海海戦で勝利した直後の五月三十日、講堂で教職員・生徒一同が参加して、海戦祝捷会を開いた。尺秀三郎学校長代理は式辞を述べ、ついで天皇・皇后、陸・海軍の万歳三唱をして式は終わった。その後、尺校長代理は、連合艦隊司令長官東郷平八郎海軍大将に対する「頌功状」を捧呈するために参内した。

しかし、戦争には戦死がつきものである。軍直属の通訳であれば、当然ながら従軍によって命を落とす者もあった。外国語学校関係の軍事通訳二〇〇余人のうち、死亡した者は七人に達した。一九〇六年二月三日、東京外国語学校校友会が主催者となり、築地の本願寺でその追弔会が開かれ、教職員・参戦通訳・卒業生・在校生など約四〇〇名が参加した。

東京外国語学校の転換

日露戦争以前の東京外国語学校は、分離独立はしたものの、志願者・入学生とも、ごく一部の科を除いて、それほど多いわけではなかった。しかし、この戦争は、外国語学校の存在と役割を、政府や軍に対してのみならず、広く一般に知らせることになり、まさに大きな転機となった。先の日清戦争が外国語学校設立の原動力であったとすれば、日露戦争はその発展をもたらしたと言える。

『文部省第三十二年報　自明治三十七年至三十八年』は、東京外国語学校がこの戦争で果たした役割について次のように記している。「本年度ニ於テハ、時局ノ影響トシテ世ノ注意ヲ惹起シ、本校ニ望ヲ属スル者甚多キヲ加ヘタリ。蓋シ軍事上必須ノ機関タル陸海軍通訳ノ需要日ニ加ハリ、為ニ本校英、仏、独、露、清、韓等ノ各語学科卒業生ヲ始

トシ、遂ニハ在学中ノ者ニ至ルマテ斉シク時局ノ急ニ応シ陸海軍通訳ノ任ニ当リタル者二百人ノ多キニ達シ、国家有用ノ実ヲ挙ケタルニ起因セスンハアラス」。外語の関係者が二〇〇名も通訳として活躍したために、外国語学校に対する世の期待が高まったと評価しているのである。

そのことを卒業生の動向からみると、戦前の一九〇三年度の卒業生は、本科五七人、選科二人、別科六二人で合計一二五人であり、その進路は、官吏三人、会社・銀行員一二人、教員五人、「外国官庁又ハ銀行ニ在ルモノ」五人、「学術研究中ノ者」二四人、未定八人であったが、戦争の起こった一九〇四年度になると、本科一一八人、選科六人、別科五三人、合計一七七人の卒業生の進路は、官吏四人、会社・銀行員一一人、教員一一人、「会社又ハ銀行員トシテ外国ニ在ルモノ」三人、留学者一人、陸・海軍通訳五八人、学術研究者一五人、兵役一人、未定一二人、死亡二人となっている。この年の卒業生は、前年に比べて五二人増えたが、それがほぼそのまま陸・海軍通訳となっていることが分かる。

この戦争を通じて、東京外国語学校の評価は高まり、入学志願者が増加した。本科および別科（一九〇四年からは専修科）の志願者／入学者の数を挙げてみると以下の通りである。つまり、一九〇三年には、本科四九四／二一一人、別科六三七／三五三人であったのが、一九〇四年には、本科五二五／二〇四人、専修科五九四／三三三人となり、さらに戦後の一九〇五年でも、本科五九一／一七三人、専修科六四九人／三一四人となっている。その増加は、露・清・韓語学科への人気の高まりによるものであり、特にそれまでは定員を割る事が多かった韓語科が増えていることが注目される。

戦中および戦後の露・清・韓語学科へ志願者の急増に対処する措置として、一九〇六年三月三十一日、この三学科に修業年限一年の速成科が置かれることになった（同年「文部省令第一号」）。それに関して、『文部省第三十四年報

表4　東京外国語学校正科学科目および週間時間数(1)
1904（明治37）年5月改正

語学科	英・仏・独			露・伊・西・清・韓		
学年	1	2	3	1	2	3
正科語学	22	22	22	18	18	18
国語漢文	2	2	2	2	2	2
英語		＊2		4	4	4
言語学	＊1			＊1	＊2	
法学通論	＊2			＊2		
経済学		＊3			＊3	
国際法			＊3			＊3
教育学	3	3	＊3			＊3
体操	3	3	3	3	3	3
計	28(29)	29(30)	30	28(29)	29(30)	30

［備考］1　同一学年内の＊は、どちらかの科目を選択する。それにより総時間数が1時間多少する（カッコ内参照）。
2　第2学年・第3学年の正科語学の授業時間内は、「当該国ノ歴史、地理及文学ノ大要ヲモ教授スヘキモノトス」とされる。
3　「明治37年　文部省令第13号」（『法令全書　明治37年』182ページ）より作成。

自明治三十九年至四十年』は、「三語学ノ簡易速成ヲ旨トシ実用的教授ヲ為サンカ為修業年限一箇年ノ速成科ヲ設ク」と述べている。

速成科は、その年からさっそくスタートしたが、志願者は三六六人もあり、わけても清語学科の希望者が多く二〇〇人に達した。露語は六一人、韓語は五五人である。このうち入学者は、露語四〇人、清語六四人、韓語三三人の合計一三八人であるから、清語学科の倍率の高さがうかがわれる。ただし、速成科は退学者が多く、実際に卒業したのは、露語一九人、清語二九人、韓語一四人の合計六二人に過ぎなかった。もっとも、退学者が多いのは、速成科だけではなく、専修科（以前の別科）も、依然として同じであった。

しかしながら、速成科はこの年だけで廃止された（一九〇七年三月二十八日「文部省令第七号」）。理由は、必ずしも明らかでないが、日露戦争で盛り上がった東洋語ブームが一段落したことがあったものと思われる。

以上のように、東京外国語学校は日露戦争と大きくかかわり、そしてその存在を示す絶好の機会をえたのである。

なお、日露戦争の最中の一九〇四年五月三十一日、東京外国語学校の規程が改正され、従来の「語科」を「語学科」とすることになった。また各学科の学科目および時間数は表4のようになった。これは、同年九月の新学期から実施されたと思われる。

また、日露戦争とは関係ないが、一九〇六年に、学年暦が改正されて、この年から、新学期の開始を従来の九月十一日から四月一日とするようになった。

また、やはりこの年の四月から、露語・伊語・西語の三学科では、副科の英語が廃止された。それまで英・仏・独語以外の学科では、副科として英語が各学年とも、毎週四時間ずつ課せられおり、その分だけ正科の授業が少なくなっていたのである。しかし、この改正により、ヨーロッパの六語学科の正科はすべて、毎週二二時間となったのである。ただし、清・韓語学科では、従来通り、副科の英語が必修として続けられた。

2　東京外国語学校の拡充

東洋語の充実と名称変更

日露戦争直後の一九〇六（明治三十九）年には露・清・韓語の三学科に速成科が置かれながらも、それが一年だけで廃止されたことは右に述べたが、一九〇八年には、東洋語速成科として、馬来語、ヒンドスタニー語、タミル語、蒙古語の四学科が設置されることになった。修業年限は、先の場合と同様に一年である。初年度の四学科の志願者は、

表5　東京外国語学校正科学科目および週間時間数(2)
1911（明治44）年1月改正

語学科	英・仏・独・露・伊・西			清・蒙・馬・ヒンド・タミル・朝鮮			
学年	1	2	3		1	2	3
正科語学	22	22	32	清、朝	18	18	18
				その他	6	14	14
国語漢文	2	2	2		2	2	2
英語				清、朝	4	4	4
				馬		＊6	＊6
				その他	16	6	6
清語				蒙	16	6	6
蘭語				馬		＊6	＊6
地理歴史				清、朝以外		2	2
言語学	＊＊1	＊＊2			＊＊1	＊＊2	
法学通論	＊＊2				＊＊2		
経済学		＊＊3				＊＊3	
国際法		＊＊3					＊＊3
教育学	3	3	3				＊＊3
体操	3	3	3		3	3	3
計	29(30)	30(31)	31		29(30)	30(31)	31

［備考］
1　馬は馬来語学科、、ヒンドはヒンドスタニー語学科の略。
2　馬来語学科は、馬来語または蘭語のどちらかを選択する。
　同一学年内の＊および＊＊は、それぞれどちらかの科目を選択する。
3　「明治44年　文部省令第3号」（『法令全書　明治44年』4ページ）より作成。

馬来語六七人、ヒンドスタニー語四九人、タミル語八人、蒙古語四八人の合計一七二人であるが、入学者はそれぞれ、二八人、三四人、五人、二九人の合計九六人であった。

さっそく、同年五月から開講し、結局、各一五人、一二人、四人、六人の合計三七人が、一回生として卒業した。

東洋語速成科の設置によって、アジアのより広い地域の言語が教育の対象となった。そして、その三年後の一九一一（明治四十四）年には、これらの四語学科は、既設の学科と同じく正科・専修科となった。またこのとき同時に、暹羅語学科も新設された。この年からの各学科の授業内容は表5の通りである。

この表5で注目されるのは、馬来語

学科では、馬来語または蘭語のどちらかを選択することになっていることである。マライ語の使われる地域は、当時の英領マライ（現・マレーシア連邦およびシンガポールなど）と蘭領東インド（現・インドネシアなど）であるが、その頃のインドネシア地域に関して学ぶためには、宗主国の言語であるオランダ語は不可欠であったために、こうした措置がとられたのである。現在の東京外国語大学でもオランダ語は選択科目として、学生は誰でも履修できるが、戦後の新制大学の発足とともに生まれ変わったインドネシヤ学科においては、マライ語とオランダ語との二か国語が必修とされ、それは一九七三年度まで続いていたのである。なお、外語とオランダ語の関係については、個別史の東南アジアの「オランダ語」の項を参照されたい。

このようにして、一九一一年からは一三語学科となり、東京高等商業学校の附属学校として出発した時には七語科であったものが、一〇年後には二倍近くまでに増えて、充実していったのである。

またこのとき同時に、韓語学科は、朝鮮語学科と改称された。前年の一九一〇年八月、日本が韓国を併合し、韓国（正式には「大韓帝国」）という国家がなくなったためである。また、これを機に、朝鮮は日本の一部であるということから、他の語学科とは、異なる位置づけを受けることになる。つまり、「東京外国語学校ニ関スル規程」の改正（一九一一年一月十九日「文部省令第三号」）では、第二条が「学科ハ分チテ英語学科……（以下一一語学科名が列記）……トス／前項外朝鮮語学科ヲ置ク」とされて、正規の学科以外に併設されたものという位置づけとなったのである。

朝鮮語学科は、その後、朝鮮語は外国語ではないとの理由により、外国語学校には必要ないのではないかというような、朝鮮語学科廃止論が高まり、さらに生徒数も減少したことから、結局は、一九二七（昭和二）年に廃止となる。朝鮮半島は、日本と最も近い外国であり、両国の人びとは有史以来の長いつながりがある。それ故にこそ、その地

は、対外発展をめざす日本から目をつけられ、橋頭堡として位置づけられた。そして、日本は、それを手に入れるために日清・日露の二つの戦争を展開したのである。附属外国語学校が設置されたのも、宿敵ロシアにうち勝ち、極東の支配権を得るために有能な人材を確保することが、その主要な理由の一つであったが、日露戦争に勝ち、韓国を併合して、長年の目標が実現したとき、その地域の人びとの使う言語を学ぶ公的な教育機関がなくなったのである。それは、歴史の皮肉というには、あまりにも重い事実であった。以上の経緯について詳しくは、個別史の朝鮮語を参照されたい。東京外国語大学に再び朝鮮語学科が置かれるのは、それからちょうど半世紀後の一九七七（昭和五十二）年である。

なお、一九〇九（明治四十二）年七月から選科に依託生という制度ができて、主に陸海軍から、ある特定の語学を学ぶために数人が送り込まれてくるようになった。学校側では、当初、軍人が入ってくると、乱暴されるのではないかとして反対する声もあったという（佐藤良雄「軍人と同窓会」、『外語同窓会誌』第一八号、一九三六年四月一日）。このような制度ができたのも、日露戦争の結果であると言える。

また、この間、一九〇八（明治四十一）年七月二十七日、学校長が高楠順次郎から村上直次郎（一八六八－一九六六）に代わった。ただし、詳しくは後で触れるが、一九一七－一八（大正六－七）年に校名存続運動が起こったとき、村上は文部省の言うなりになって新学校設立を進めようとしたとして、東京外国語学校の歴史においては、評判のかんばしくない校長とされている。

講演会の禁止

一九〇八（明治四十一）年九月二十九日、小松原文相は、学生・生徒の風紀取締り強化に関して通牒を出し、彼ら

の政治的な活動のみならず、同人雑誌の編集、観劇、読書傾向に至るまで規制するよう指示した。当時の第二次桂太郎内閣は、典型的な藩閥官僚内閣であった。次第に広まりつつあった社会運動を抑え、社会主義政党の結成を禁止したり、のちに大逆事件（一九一〇年五月）をフレームアップするなど、「冬の時代」をもたらしたのもこの内閣であるし、また対外的に韓国併合をなしとげたのもこの内閣である。この内閣は、今日の歴史学においては極めて評判の悪い内閣であるが、実際、ヨーロッパ近代思想・文化が国民の自主性を促し、それが政治批判を高めて、現実の社会秩序を揺るがすことに対して、非常な危機意識を抱いていた。「戊申詔書」（一九〇八年十月）は、日本人が欧米の個人主義的思想になじむことなく、神聖なる皇基の下で伝統思想を堅持することを訴えたもので、第二の教育勅語とも言われるが、右の通牒は、それを学生・生徒を対象として具体化したものである。文相の小松原英太郎（一八五二―一九一九）は、若い時には過激な民権家として筆禍事件に遭ったこともあるが、今や内務官僚の元締山県有朋の信頼する部下となっていた。

この通牒によって、外国語学校の名物である「講演会」が禁止された。もちろん、学校が自発的にやめたのであるが、客観的にいえば、通牒がそれを中止させたのである。

外語では、独立の翌年の一九〇〇（明治三十三）年から、「講演会」という名の下に、生徒と教授たちが一体となって外国語の朗読・演説・演劇などを行う催しが、ほぼ毎年、高等商業学校の講堂を借りて行われてきた。第一回の時は、ミラボー議会演説暗唱（仏語科）、独逸語演説（独語科）、『論語』支那語音読、ウイルヘルム・テルの上演などが行われたという。その後、次第に外国語による演劇（語劇）が、いかにも外国語学校らしい行事として好評をとり、その名を高めていたのである。

日本の新劇が素人芝居のレベルを脱皮するのは、もう少し後になってからであり、坪内逍遥の主宰する文芸協会が

『ハムレット』や『人形の家』を上演した一九一一（明治四十四）年頃からである。特に、オフェリヤやノラを演じた松井須磨子は好評を博し、一九一四（大正三）年、師の島村抱月が作った芸術座で『復活』のカチューシャを演じて一躍スターダムにのし上がり、彼女の吹込んだ劇中歌「カチューシャの唄」（中山晋平作曲）は二万枚も売れたという。しかし、演劇全体から見れば、新劇は歌舞伎や新派に比べると、まだまだ上演の機会が少なかった。そのような時期であれば、外国語学校の講演会は、新劇ファンならずとも注目するものであったである。

例えば、それは『万朝報』『時事新報』など当時の有力な新聞には、その予告すら載っていた。予告といっても学校が出したのではなく、新聞社の方で自発的に載せたのである。当時は、現在と違って、演劇やスポーツなどのパフォーマンスが少なかったから、こうした行事は新聞も積極的に取り上げたし、人びとも楽しみにしていたのである。外語の講演会以外でも、一高や早稲田の野球、高等商業の端艇競漕（ボート大会）、音楽学校の演奏会なども、毎回ほとんど新聞に出ている。

ここで、一九〇五（明治三十八）年三月二十四・二十五日に行われた第五回の講演会に関して、前日の三月二十三日の『万朝報』の記事を引いておこう。

外国語学校講演会

来る廿五六日午後一時より高等商業学校講堂に於て開かる。其委細。△一樓光明（喜劇）清語科、△虚無僧（暗誦）露語科、△渡船（喜劇）西語科、△鏡の唱（暗誦）独語科、△嫉妬の刃（劇）伊語科、△正義の勝利（劇）英語科、△球手箱（喜劇）韓語科、△老木の名残（劇）葡語科、△渋染大名縞（喜劇）仏語科

この当時は日露戦争の真っ最中であったが、外国公使や公爵・侯爵はじめ朝野の名士を集めたこの講演会は、まさに帝都を代表する催しであったといっても過言ではない。

このような講演会が、この年つまり一九〇八年の四月まで行われていた。しかし、文相の一通の通牒によって廃止されてしまったのである。講演会は、文部省、さらには内務省の危惧するような政治的な活動では決してなかったが、生徒たち自らが演じる自主的な企画である限りは、その例外として免れることはできなかった。形式的には、学校側が自主的にやめたことになってはいたが、それは実質的には禁止であった。

もっとも、こうした企画の常として、パフォーマンスが年々派手になり、語学科同士が華美を競い合うようになりつつあった。特に、語劇で男子生徒が女裳して演技することは、公序良俗に反するものとして以前より批判があった。こうしたことが、学校生徒の本分からはずれるとして、風紀上から問題になっていたのである。だが、それとその中止とは別のことである。

講演会の復活を求める声は、当然ながら生徒の中から毎年のように上がり、学校に復興を求めた。だが、学校側としても文部省の通牒を無視することはできなかった。例えば、一九一〇年六月二十四日、生徒の代表委員に対して、次のような回答を出している。「講演会及び全校生徒の講演会類似の会合は、曩に其弊多くして利益少きを認め之を禁じたり。仮令多少の改良を加ふるも今之を再興するは時宜に適したるものにあらず、故に学校は主任会議の決議を経て之を許可せざる方針を定めたり。（以下略）」（『校友会雑誌』一九一〇年十二月）。

講演会は、その後しばらく禁止されたままであった。それがなくなった哀しみを、一人の生徒は次のように書いている。「凡そ一校の声価は実質の如何と相俟ちて所有名物の有無により限定せらるゝ事有り、一高の記念日の如き高工の展覧会の如き或は稲門の野球、駒場の陸上運動の如き実に都下学界の名物にして天下学生の憧憬措かざる所とす、然らば我校の所謂名物とは何ぞ、吾人は記して爰に到り哄嘆長息、憮然として筆を抛たんと欲す、吁嗟一橋の名物として其名天下に喧囂し苟も耳あるもの鼎鐺なほ之を聞きし、我校の講演会も小松原前文部大臣の施学方針に因り明治

四十二年以後遂に廃止せらるゝの悲運に遭遇せり」（渡会貞輔「母校発展策」、『校友会雑誌』一九一二年三月）。外語が外語として広く天下に知られる機会が失われてしまったことへのくやしさが率直に表されている。

この生徒たちの願いがかない、この講演会は語学大会として復活するのは、禁止されてから一〇年後、大正デモクラシーが盛り上がって政党政治が行われるようになった一九一九年二月である。これについては後述する。

なお、外国語学校のもう一つの伝統である競漕大会は、本校である東京商業学校の代表的な行事を受け継いだものであり、毎年春（秋の時もあったようである）、隅田川で開かれた。始まったのは講演会よりも遅いが、こちらの方は規制を受けることなくその後も行われていった。

科および学科の新設

さて、東京外国語学校においては、その後も、科および学科の新設や改名があいついだ。

まず、一九一三（大正二）年二月、西語・清語および韓語の三学科に速成科を設けられることが決まり、同年度から開講した。修業年限は、これまでの速成科と同じく一年である。初年度の入学志願者・入学者・卒業者の数は、西語四七／四〇／九人、清語三〇／二二／八人、韓語九／五／〇人である。

また、一九一三年九月二十六日、清語学科が支那語学科と改名された。これは辛亥革命の結果、前年二月に清朝が倒れて中華民国が成立したためである。

一九一六（大正五）年一月、葡語学科が新設された。『文部省第四十三年報　自大正四年四月至大正五年三月』には、その理由として、「南米『ブラジル』方面ノ貿易及移民ノ必要ニ応セントスルニ在リ」と記されている。ただ、当時の日本にあってはポルトガル語に対する関心がそれ程には高くなかったせいもあって、当初の四年間は本科の入

学者はなく、もっぱら専修科の生徒だけであった。なお、葡語学科の設置とその時期の様子については、各論のポルトガル語を参照されたい。

また、葡語学科の設置にともない、卒業生の需要の少ない暹羅語学科は当分の間の生徒募集を中止することにした（『文部省第四十三年報』）。

一九一三（大正二）年二月の神田の大火　東京外国語学校全焼す

このように順調に発展してきた東京外国語学校であったが、その途中の一九一三（大正二）年二月二十日に起きた神田一帯の大火災によって校舎が全焼した。『東京朝日新聞』二月二十一日の記事によると、この火事は二十日未明午前一時四十分頃、神田三崎町二の四の救世軍殖民館あたりより出火し、折から厳寒の烈風にあおられて、神田一帯を火の海と化した。同紙の記事より一部を引いておこう。

三崎町神保町方面を一嘗めにしたる猛火は、見る〳〵錦町三丁目三、四、五番地より付近一帯に延焼し、同十八番地まで同町大半四百六十戸を焼払ひ、東京工業学校、下宿業朝陽館等より同十三番地の外国語学校をも焼落して道路の南側に移り、語学校別館及新築の学士会事務所より、更に火の手は東に向ひ、工藤写真館、錦輝館、錦城商業学校、大日本蚕糸会等の大建築を焼払ひて一ツ橋河岸（濠端）に出で、材木商安達伝兵衛方の三階建材木倉庫に移りたるが、同倉庫には五万本の丸太納めありたるより、益々火勢を添へ、同倉庫は二十日朝九時頃に至るも尚炎々燃ゑつつあり。斯くて午前七時、火は外濠電車線路を超ゑて東側に移り、正則英語学校前通り錦町三丁目六番地付近十六戸は瞬く間に焼き払ひたるが、国民英学会向側の大江屋及下伝の両薪炭商は、何れも二十余万円の資産家なるが、巨大なる薪炭庫に火が入りて焼落ち物凄き光景を呈したり。而して此の付近の火花は盛に御濠内なる文部省の庁舎の方に冠りたれば、同省にては万一を気遣ひ必死に防火に盡力したり。然るに一方何時しか同町電車通りなる橋田病院裏手錦町三の二十に飛火して、十二三戸を焼き東京瓦斯会社裏手に迫

り一時同社も頗る危険に瀕したるも幸ひに無事なるを得て、各方面共廿日午前七時十分頃略鎮火せり。

「火事と喧嘩は江戸の華」と昔より言われてきたが、それは江戸が東京に代わり、時代が近代に入っても、基本的には変わりはなかった。東の銀座では一八七二（明治五）年の大火をきっかけとして煉瓦街に変えて、火に強い街造りを始めていたが、それはほんの一部に過ぎなかった。神田では、この火事の二二年前の一八九二（明治二十五）年にも、猿楽町から出火して日本橋区本石町までに及ぶ大火が起こっていた。今回の火事の焼失戸数も神田区だけでも二、一〇〇戸を超え、重傷者も百人以上を出した。特に今回の罹災地には学校が多く、右の記事にもあるように、東京外国語学校、正則英語学校などが全焼したが、そのほかにも東京工科学校、研数学館、東洋学院、専修学館、東京電機学校、順天中学校などが類焼し、さらに同文館、三省堂、東京堂、富山房、有斐閣などの書店・出版社も罹災した。

東京外国語学校では、正門、門衛、便所を残して、本校、分校ともに全焼した。ただ、火が移るまでに少し時間があったので、重要書類の全部と、図書の大半は搬出することができた。また、焼けあとの中から、重い金庫が出てきた。これはちょっとしたニュースとなり、二月二十一日の『東京朝日』の紙面に紹介され、夏目漱石の連載小説『行人』の欄下にその金庫の写真が載っている。また、この金庫の製造元の竹内金庫衡器商店は、同紙二月二十四日の一面最上段の「竹内製金庫と火災」という広告を出し、「多年の実験と独特の構造に係る弊店製金庫は今回神田大火に際し悉く財宝保全の効を全ふし左の罹災諸彦より堅牢にして安全なるを証明せられたり」という説明をつけて、無事であった一二個の金庫を紹介しているが、その最初の四つは外国語学校のものである。

さて、東京外国語学校では、この火事のために、本校を文部省内の修文館に移し、さらに高等商業分教場に分教室

を設けて急場をしのいだ。

そして、同年九月五日、本校敷地内に仮校舎が完成したのでそこに移転するが、まったくのバラックに等しく、教員・生徒ともに、しばらくの間は苦労することになる。文部省は、その後、東京外国語学校の本校舎の新築を計画するが、間もなく起こった第一次世界大戦により、その新築の方向は、大きく変わっていくことになる。

なお、一九一三年八月三日に、創立十五周年祝賀会が行われた。この祝賀会は、本来は前年八月に行われるはずであったが、同年七月三十日に明治天皇が崩御した直後であったので延期し、一年遅れで挙行したものである。

四　二つの運動と繁栄の時代の東京外国語学校

1　校名存続運動

第一次世界大戦と教育改革

一九一四（大正三）年七月、ヨーロッパで戦争が勃発した。いわゆる第一次世界大戦である。東京外国語学校と、この戦争との関係は、日露戦争の時と比べはるかに少なかったが、全くないわけではなかった。なぜなら、日本が連合国として独墺に対して参戦したことから、ドイツが中国から租借していた青島を攻撃するため膠州湾に出兵したので、その際に、独語学科出身の卒業生が動員されたからである。また、ドイツ兵の俘虜収容所が松山・徳島など各地に作られたが、そこで通訳に当たったのは、ほとんどが外語の関係者であったという。さらに、ロシア革命が起こる